

20世紀初頭期「バーデン・ヴュルテンベルク工業地帯」のペンドラー労働者

—「都市近郊農村」に着目して—

宮 脇 慎 也

1. はじめに

「日々、場合によっては週ごとに、自身の居住場所と、その居住ゲマインデには位置しない労働場所とを往復移動する労働者達」¹。この言葉は1929・30年度版のヴュルテンベルク統計年鑑において、グリースマイアー（Griesmeier）がペンドラー労働者（以後ペンドラーと呼ぶ場合もある）を簡潔に定義づけたものである。語源であるペンデル・アルバイター（Pendelarbeiter）とは、要するに、朝に外部の労働場所に向かい、夕に自宅に帰るといった、あたかも振り子運動を思わせる行動をとる通勤労働者のことを指し、また、こうした通勤行動それ自体をペンデルヴァンデルング（Pendelwanderung）と呼ぶ。本稿は、西南ドイツにおけるペンドラー労働者の実態分析に迫るための序論的検討の1試論である。

ペンドラー労働者の実態分析を行うことの意義は、人口動態や労働市場の分析、さらには住宅問題等、多岐に渡って見出すことができよう。本稿以降の論考では、そうした多種多様な課題群の中でも、とりわけ、ペンドラー労働者を都市化の進展の一事象として捉え、彼らの実態分析を行うことにより、「都市近郊農村（Vorortgemeinde）」あるいは「都市農村連続体（Stadt-Land-Kontinuum）」²の変容に迫ることをめざしている。

では、一体なぜペンドラー労働者の実態分析が重要となるのか。この点については、加藤房雄氏の視点が注目し値しよう。氏は、大ベルリン形成の事例に即して、ベルリン南部のテルトウ郡に止目し、そこに「都市農村連続体」を見出しつつ、以下のように述べるのである。「ペンドラー労働者の生成は、鉄道網の整備・拡充に代表される都市化の進展と密接不可分の関係にたつものであった。いや、と言うよりもむしろ、農村地域と都市のあいだを日々往復するペンドラーの存在そのものが、『都市農村連続体』の落とし子であり、そうした『連続体』の歴史的個性を自らのうちに体現する一契機に他ならなかった」³、と。これは、ペンドラー労働者が、都市と農村との橋渡しの役割を担ったことを示す重要な指摘であろう。西南ドイツにおけるペンドラー労働者の形成過程と農村社会の変容との相関を問う本稿にとっても、加藤氏の視角はすぐれて示唆的であると思われる。

それでは、松田智雄氏の開拓者の業績以降、ドイツ経済史家により一貫して注目され続けている西南ドイツ、とりわけ、互いに密接な連繋をもつ、ヴュルテンベルクの「ネッカー中流域工業地域」⁴及び、マンハイム周辺の工業地帯から成る「バーデン・ヴュルテンベルク工業地帯」⁵と呼

¹ Josef Griesmeier, Die Pendelwanderung in Württemberg, in: *Württembergische Jahrbücher für Statistik und Landeskunde*, Jg. 1929 u. 1930, S. 60.

² 加藤房雄「プロイセン都市近郊農村史とベルリン—テルトウ郡の鉄道建設と世襲財産所領—」『土地制度史学』第172号（2001年7月）、ならびに、加藤房雄「ベルリン圏の都市化と近郊ゲマインデの自治—19世紀末～20世紀初頭期テルトウ郡の実態に即して—」『社会経済史学』（2002年5月）（両論文とも大幅に改稿されて、同「ドイツ都市近郊農村史研究—都市史と農村史のあいだ」序説—）勁草書房（2005年）に所収）を参照。

³ 加藤房雄「ベルリン圏の都市化と近郊ゲマインデの自治」、10頁。

⁴ 三ツ石都夫「ドイツ地域経済の史的形成—ヴュルテンベルクの農耕結合—」勁草書房（1997年）、37頁。

び表せる一大工業地帯における「都市農村連続体」の具体像は、はたしてどのようなものだったのか。本稿以下予定の一連の論考の一般的課題は、これであり、本稿は、そうした実証的歴史的テーマの全面的検討に進む上での一つの準備的考察にすぎない。

上述の課題に迫る本稿の考察の順序は、およそ、以下のとおりである。まず、20世紀初頭期におけるヴュルテンベルク邦全体におけるペンドラー労働者の数量的実態と構造を、主として、ヴュルテンベルク・ペンドラー労働者に関する基本文献たるグリースマイアーの記述を再構成しつつ提示し、ヴュルテンベルク・ペンドラー労働者に関する諸特徴を明らかにする（第2節）。その後、個別事例として、ヴュルテンベルク邦の中で、最大の労働市場であったシュトゥットガルト周辺におけるペンドラー労働者の状況を明らかにし、次に、バーデンのキルヒハイムの一工場に見られる雇用労働者層それ自体の状況と、19世紀後半期に工業化の波に飲み込まれたプファルツのマウダッハ村の状況とについて、それぞれ、資料から読み取れる限りでの整理と把握を試み（第3節）、最後に、以上の分析から得られた諸成果を整理した上で、残された課題を提示してむすびにかえる（むすび）。

2. ヴュルテンベルク・ペンドラー労働者の全体的情勢

2. 1 ペンドラー労働者の生成・背景⁶

さて、西南ドイツ、ヴュルテンベルクのペンドラー労働者はいつごろから生成してきたのか、また、20世紀初頭においてどれほどの人数がこの通勤形態に携わっていたのか。ペンドラーの規模については、ヴュルテンベルク統計年鑑をひもとけば、たちどころに明らかになる。ドイツにおいては、ペンドラー労働者に関する最初の全国的統計が、1900年の国民調査の際に行われた。そして、その後ヴュルテンベルクにおいては引き続き、1910年、1925年に同様の調査が行われている。1925年には、155,820人のペンドラー労働者が把握され、その数は、当時の就業者人口（1,538,079人）の10分の1を超える数値であり、当時において既に、相当数の労働者がペンドラー労働者であったことが知られる。⁷

では、ペンドラー労働者層は、どのように発生し、拡大してきたのか。換言するならば、ペンドラー労働者が発生・拡大する条件とはいったいいかなるものであったのだろうか。この点について、三ツ石郁夫氏は、主たる前提として、鉄道制度の整備と労働市場整備の二点を挙げている。⁸無論、この指摘は、ペンドラー生成の条件を示したものとして、最も重要な指摘と言いうる。確

⁵ 松田智雄氏は、「ひとつの高度な『工業化』地帯を形成」した同地域を、「バーデン・ヴュルテンベルク地帯」と表記しているが、以下では、本稿の問題視角と課題に照らし合わせて、同地域を「バーデン・ヴュルテンベルク工業地帯」と表記することとする。松田智雄『ドイツ資本主義の基礎研究—ヴュルテンベルク王国の産業発展—』岩波書店（1967年）、445-473頁を参照。また、バーデン・ヴュルテンベルクの工業発展については、ベルケ（Willi A. Boelcke）の詳細な研究がある。本稿においても、19世紀後半から20世紀初頭にかけての、当該地域における工業発展について、多くの示唆を受けている。Vgl. Willi A. Boelcke, *Wirtschaftsgeschichte Baden-Württembergs von den Römern bis heute*, Stuttgart, 1987, S. 215-311.

⁶ 本節における事実関係は、特に断らない限り、J. Griesmeier, *a. a. O.* においている。

⁷ この規模が、ドイツにおける他の諸邦と比べてどのような評価が下されるべきなのか、これに関しては、各邦の調査対象、分析方法が統一されておらず、時期も異なるために判断が難しい。しかし、ロッシュ（H. Losch）の整理によれば、19世紀前半に、ペンドラー労働者に高い関心を示し続け、一貫して持続的な統計を行ったのはヴュルテンベルク邦政府のみであり、このことから、いかにこの問題がヴュルテンベルクにおいて重要であり、且つ、経済構造と深く結びついていたかを伺い知ることができよう。Vgl. Hermann Losch, *Die Statistik der Pendelwanderung*, in: *Württembergische Jahrbücher für Statistik und Landeskunde*, Jg. 1929 u. 1930, S. 116-118.

かに、鉄道路線の整備がなければ、長い距離を日々往復するペンドラー労働者がこれほどまでにその規模を拡大することはなかったであろうし、労働市場についても同様であろう。しかし、この二点以外にも、ペンドラー労働者の生成の諸要因は存在し、その中には、当時の社会状況や、西南ドイツ独自の経済構造と密接に関わっているものがある。それらのうち、グリースマイアーの所論から読み取れる限りでの論点を示せば、以下のことが挙げられよう。⁹

まず、ここで、19世紀前半において、重要な法が導入されていたことが想起されねばならない。すなわち、営業の自由の導入¹⁰である。グリースマイアーによれば、労働者が労働場所に住むことは、「本来的なことであり、自然なこと」¹¹であった。家父長的なツフト制度のもとでは、親方・徒弟見習い修了者・徒弟たちは、その労働場所に居住していたが、営業の自由の導入は、この点についての根本的な変革を作り出した。グリースマイアーは、営業の自由の導入の効果として、競争の促進、企業の設立、発明と技術的革新との導入、経営の巨大化を挙げるが、これらのうち、とりわけ経営の巨大化によって、親方と徒弟たちとの関係はますます非個人的な関係となったのである。その結果、親方と徒弟の共同宿舎や、それに伴う賄の制度は、徐々に廃止され、徒弟たちは、経営場所 (Arbeitsstätte) の外部に居住することを強要された。しかし、この営業の自由の導入を、ペンドラー労働者の大量発生に関する積極的な要因とみなすことはできない。というのも、営業の自由の導入は、これについての制限を撤廃したことを意味するに過ぎないからである。

では、労働者達を、積極的にペンデルヴァンデルングに駆り立てた要因とは一体何か。当該時期は、産業革命を経たドイツが「高度産業化への道」¹²を歩んだ時代であった。都市や工場にとって都合の良い場所には、比較的大規模な工場が数多く建設され、それに伴い、農村から都市あるいは工場所在地への大量の移住が始まった。そうした土地に人口過密現象が生じ、居住場所の欠乏が住居費用の上昇を生じさせたのである。¹³こうして、わずかな報酬しか得られない労働者達は、「都市から周辺・近郊ゲマインデへと追いやられ、そして、日々、自らの居住地域と都市の間の、多かれ少なかれ長い距離を進むこと強要された」¹⁴のである。

また、労働者をペンデルヴァンデルングに駆り立てた要因は、こうした都市内部における諸要因のみに求められるわけではない。さしあたってここで指摘しうるのは、あの労働者農夫の近代的形態と位置づけられるペンドラー労働者の存在である。19世紀前半の時期において、同地域の工業的基盤が、一方で工場における労働者として働き、他方で、2 ha以下の農地で農業に従事する労働者農夫に見出せることは、松田智雄氏の先駆的業績により、広く知られている。¹⁵19世紀後半

⁸ 三ツ石氏が示すところによれば、ヴェルテンベルクの鉄道網は、1890年にはほぼ完成しており、ヴェルテンベルク四県にはほぼ均等して敷設されていた。三ツ石郁夫、前掲書、270-271頁参照。

⁹ Vgl. J. Griesmeier, *a.a.O.*, S. 60-66.

¹⁰ ヴェルテンベルクにおいては、営業の自由は、1828年に導入されている。

¹¹ J. Griesmeier, *a.a.O.*, S. 61.

¹² W. A. Boelcke, *a.a.O.*, S. 215.

¹³ これに関連して、都市から周辺・近郊ゲマインデへと移住したのは、一概に労働者だけではなかったことを強調しておきたい。工場それ自体もまた、採算性の理由から都市を逃れ、周辺ないし近郊へと移ることがあった。この場合、「都市周辺に位置した諸工場は、都市に居住する労働者だけを日々の通勤に駆り立てたのではなく、都市近郊からの労働力もまた呼び寄せたのである」。この引用は、ペンデルヴァンデルングが、農村、あるいは郊外から都市へという一方的な流れを形成しているのではなく、都市から近郊へ、という逆の流れもまた形成しているという、ペンデルヴァンデルングの重要な特徴を示している。Vgl. J. Griesmeier, *a.a.O.*, S. 62.

¹⁴ *Ebenda*, S. 61.

¹⁵ 松田智雄、前掲書、特にその「3展望」の項を参照。

の「高度産業化」の時代を迎えると、一部の労働者農夫たちは、一方で、従前どおり農業労働に従事しつつ、他方で、ペンドラー労働者として都市の産業に従事するようになった、と考えられるのである。さらに、20世紀初頭に至ると、農業労働に従事するペンドラー労働者は、その数を増しつつ、その内実を変化させていった。シュトロースハイン (Kurt Strohshein) が指摘するところの、「Bauern-Arbeiter (労働者農夫)」から「Arbeiter-Bauern (農夫労働者)」¹⁶への転身とでも言うような、工業労働への重心のシフトが、それである。

農村から都市へと向かうペンデルヴァンデルングの流れを形成する農民の多くにとっては、ペンデルヴァンデルングは、「経済的に必要不可欠な副業」¹⁷としての工場労働に就くためのものであった。さらに、そのようなペンドラー労働者は、土地を持たない他の就業者達に比して、なかば強制的にペンデルヴァンデルングへと駆り立てられていた。土地所有を伴う彼らは、多かれ少なかれ、移転の自由を放棄しており、また、労働場所への移住ができなかったからである。¹⁸

これに加えて、ペンドラー労働者の背景となる零細経営が支配的であったヴェルテンベルクといえども、実際には、ヴェルテンベルク邦内において地域差があったことにも十分な注意を払わなければならない。表2に示されている平均土地所有面積からも、はっきりと零細経営が特徴的であるといえるのは、邦の西部、すなわちネッカー県とシュヴァルトツヴァルト県のみであり、他方の東部、ヤクスト県とドナウ県は、零細経営が特徴的であると位置づけることはできない。このような差異は、一般に、農地の相続形態の相違にその原因が求められているのであるが、ここで強調すべきことは、ヴェルテンベルク内の工業地域は、シュトゥットガルトを中心としたネッカー川沿いに広がっており、そこに、「ネッカー中流域工業地域」を形成しているが、そうした地域こそがまさに零細経営の支配的な地域であった、ということである。ペンドラー労働者の数も、やはりその一帯に多く分布しているのである。

表1 ヴェルテンベルク内における土地所有面積 (1873年)

地 域	農業経営数	構 成 比				平均土地 所有面積
		1 ha以下	1～5 ha	5～20ha	20ha超	
ネッカー県	89,679	42.4%	47.3%	9.9%	0.4%	2.3ha
シュヴァルトツヴァルト県	92,523	37.6%	49.8%	11.9%	0.6%	2.6ha
ヤクスト県	63,494	33.1%	38.6%	23.6%	4.8%	4.9ha
ドナウ県	97,823	28.1%	37.2%	27.7%	7.0%	6.2ha
ヴェルテンベルク全域	313,519	36.0%	44.1%	17.1%	2.8%	3.8ha

出典：三ツ石郁夫『ドイツ地域経済の史的形成—ヴェルテンベルクの農耕結合—』勁草書房 (1997年)、61頁より作成。

¹⁶ Kurt Strohshein, *Die Pendelwanderung Stuttgart*, Dissertation, Tübingen, 1937, S. 18.

¹⁷ J. Griesmeier, a.a.O., S. 62.

¹⁸ 但し、グラーベ (C. Grabe) はこの見解に否定的である。それによれば、鉄道等の発達した交通機関が、居住場所を変えることなく、労働場所へ通うことを可能とし、ペンドラー労働者たちは、その通勤の苦勞をあることのために選んだというのである。それは、「故郷への愛着」であった。つまり、「農村のペンデルヴァンデラーは、自分が育ってきた環境、すなわち、自分が最も自由に且つ最も安全に行動できる環境を離れることよりも、遠い道のりの苦勞を選んだ」というのである。Vgl. Charlotte Grabe, *Der Einfluss der Pendelwanderung auf die Arbeitnehmer*, in: G. Braun (hrsg. v.), *Wirtschaftsstudien, neue und erweiterte Folge der Volkswirtschaftlichen Abhandlvngen der badischen Hochschulen*, Karlsruhe, Jg. 1926, S. 4.

2. 2 ヴュルテンベルク・ペンドラー労働者の就業構造

前項では、ヴュルテンベルクにおけるペンドラー労働者の生成の前提を述べてきたが、ここでは、19世紀前半にヴュルテンベルクにおいて把握されたペンドラー労働者の数量的実態を提示する。こうした作業は、本稿の目的である都市近郊農村の変容を探る上で前提となるペンドラー労働者の全体的把握として重要なことと思われる。¹⁹

さて、上述の三回にわたるヴュルテンベルクのペンドラー統計によって示された、ペンドラー労働者数は、表2のとおりである。1900年の時点で、居住場所調査²⁰では6万人程度の規模であったのが、1925年には、15万人以上にも膨れ上がっている。これは、1925年の時点で、就業者人口の10分の1が、その居住場所で働いていないことを意味し、さらには、工場労働者の4分の1がペンデルヴァンデルングを行っていることを示している。

三回の調査のいずれも、労働場所調査の結果は、居住場所調査のそれよりも小さい。これは隣接する諸邦からの流入ペンドラー (Hereinpendler) の数は含まれてないことに起因する。ヴュルテンベルクから州境を超え、他の諸邦へと向かう流出ペンドラー (Hinauspendler) の数は両者の差として明らかとなるが、しかし、グリースマイアーによれば、外部からヴュルテンベルクへとやってくるペンドラーの数が、同様の規模であったかどうかは疑わしい。なぜならば、バイエルン・バーデン・ヘッセンの諸国境ゲマインデ

(Grenzgemeinde) を対象に行われた調査では、3,993人しか検出していないからである。

表3は、居住場所調査による、産業区分と、ペンドラー労働者の職業上の地位における絶対数と割合を表している。同表によると、第1に、圧倒的多数のペンドラー労働者が工業・手工業に携わっていたことが判明する。それは、同部門に

表2 ヴュルテンベルク・ペンドラーの規模(人)

	居住場所調査	労働場所調査	差(注)
1900年	59,428	55,134	4,294
1910年	88,155	81,601	6,554
1925年	155,820	145,691	10,129

出典：J. Griesmeier, Die Pendelwanderung in Württemberg, in: *Württembergische Jahrbücher für Statistik und Landeskunde*, Jg. 1929 u. 1930, S.66. の記述と表より作成。

注：差は居住労働調査の結果から労働場所調査の結果を控除したものであり、符号は全て正である。

表3 各経済区分におけるペンドラー労働者数と割合

経済部門	ペンドラー(居住場所調査)の人数(人)							
	総数	%	自営業	%	職員	%	労働者	%
農 林 業	1,232	0.2	9	0.01	112	2.6	1,111	1.7
工業・手工業	143,118	23.8	492	0.55	8,754	13.6	133,872	30.8
商業・交通産業	9,209	5.7	129	0.34	4,196	6.5	4,884	14.1
その他の経済部門	2,261	1.7	50	0.33	1,646	3.0	565	3.2
合 計	155,820	10.1	680	0.22	14,708	7.8	140,432	25.4

出典：J. Griesmeier, a.a.O., S. 70. の表より作成。

注) 割合は、各項目における就業者中のペンドラー労働者の割合を示している。

¹⁹ ここで示される事実関係は、J. Griesmeier, a.a.O., S. 65-113. の所論におおっている。

²⁰ ペンドラー労働者は、居住場所と労働場所の二つの地点から統計的に把握されうる。前者は、居住ゲマインデから外部へ出勤する流出ペンドラー (Hinauspendler) であり、後者は外部から通勤してくる流入ペンドラー (Hereinpendler) である。ロッシュによれば、「この二重の統計の助けを借りてのみ、近代ペンデルヴァンデルングの本来の問題が数多く照らし出される」のである。H. Losch, a.a.O., S. 115.

おける全就業者の23.8%に達し、なかでも、労働者達に限れば、その割合は30.8%にも達する。それとは対照的に、農林業においては、ペンドラー労働者は就業者中、たったの0.2%しか示さず、そのうち、自営業者に限れば、1万人に1人という割合しか示さない。商業・交通産業の区分では、農林業に比べれば、ペンドラー労働者は大きな役割を担っていると言えるが、しかし、工業・手工業に比べれば、やはり低い水準にある。

全ての産業区分において共通することは、労働者に属する者が、全ペンドラー労働者の中で、90.12%²¹を占めていることから看取できるとおり、労働者が、もっともペンデルヴァンデルングを強いられたことである。他方、労働者以外の者達、とりわけ独立自営業者は、ほとんど、ペンデルヴァンデルングに参加できない状況にあった。というのも、彼らは、その労働場所 (Arbeitsort)、と言うよりも、その経営場所 (Arbeitsstätte) に縛られているからである。労働時間外の作業場の見回りが、彼らの住居を経営場所、あるいは近辺に置くことを必要としたのである。とは言え、わずかながらも、ペンデルヴァンデルングに参加する自営業者が存在している。それは、比較的大きな諸経営の経営者達であり、彼らは、多くの場合、都市に居住し、周辺地域に位置する経営あるいは作業場へと車で通勤したと考えられる。

次に、ペンドラー労働者問題は、決して、男性労働者に限られたものではないが、女性ペンドラーは、男性に比べるならばやはり少ない(表4参照)。女性ペンドラー労働者は、絶対数では、男性ペンドラーの3分の1程度しかおらず、男性労働者が圧倒的多数を占めている。しかし、グリースマイヤーは、このことが「女性の能力はペンデルヴァンデルングに適さないということを意味しているわけではない」²²と述べている。男性ペンドラー労働者が、工業・手工業に従事する労働者の中で、31.1%を占める一方で、女性のそれは30.2%と、ほぼ同じ割合を示している。また、商業・交通産業における職員の場合、女性ペンドラーの割合は、男性のそれよりも上回っている。これは、それぞれの経済区分の中で、いかなる労働力がどれほど必要とされているか、ということに原因が求められるだろう。商業・交通産業の職員とは、事務員や売り子を含んでおり、その労働力需要が高ければ高いほど、女性ペンドラーの割合は必然的に高められるのである。²³

表4 産業区分内のペンドラー労働者の男女構成

	経済部門	ペンドラー労働者 (単位:人)					
		総数	%	職員	%	労働者	%
男性	農業・林業	1,097	0.4	102	2.5	987	2.5
	工業・手工業	106,873	24.2	6,989	14.0	99,450	31.1
	商業・交通産業	7,252	7.2	2,694	5.9	4,445	17.7
	その他の経済部門	1,710	2.8	1,256	3.3	409	4.1
	合計	116,932	13.4	11,041	8.0	105,291	26.7
女性	農業・林業	135	0.1	10	4.8	124	0.5
	工業・手工業	36,245	22.7	1,765	12.3	34,422	30.2
	商業・交通産業	1,957	3.2	1,502	8.0	439	4.6
	その他の経済部門	551	0.7	390	2.3	156	2.0
	合計	38,888	5.8	3,667	7.3	35,141	22.2

出典: J. Griesmeier, a.a.O., S. 69. の表より作成。

注) 割合は、各項目における就業者中のペンドラー労働者の割合を示している。

²¹ 表3の労働者の地位にあるペンドラー数をペンドラーの総数で割った計算の結果である。

²² J. Griesmeier, a.a.O., S. 68.

2. 3 ヴュルテンベルクにおける労働市場圏

次に、ヴュルテンベルクに住むペンドラー労働者の地理的分布を見ると、ペンドラー労働者が集中して居住する地域と、ペンドラー労働者が、ほとんど、または、全く見出せない地域とに別れていることが分かる。この分布は、ヴュルテンベルク領域内における工業の分布と対応し、多くの労働市場が「ネッカー中流域工業地域」に集中している。グリースマイアーは、このことに止目し、ゲマインデ単位の政治的区分を超えたペンデルヴァンデルング領域、すなわち労働市場の析出を試みている。それらを視覚的に単純化して示したものが、図1である。ここで注意を要することは、地図上の広がり、その労働市場の規模を示すわけではないということである。図1における楕円は、これら諸地域の広がりを、単純化して示したにすぎない。

これに拠れば、ヴュルテンベルク内には、10を数える労働市場が形成されていた。すなわち、シュトゥットガルト (Stuttgart) 地域、ハイルブロン=ネッカーズルム (Heilbronn=Neckarsulm) 地域、ベジツヒハイム (Besigheim) 地域、ゲッピンゲン=ガイスリンゲン (Göppingen=Geislingen) 地域、キルヒハイム=ロイトリンゲン (Kirchheim=Reutlingen) 地域、グミュンド=ハイデンハイム (Gmünd=Heidenheim) 地域、オーベルンドルフ=トゥットリンゲン (Oberndorf=Tuttlingen) 地域、ウルム (Ulm) 地域、テットナング=ラーフェンスブルク (Tettngang=Ravensburg) 地域、そして、ショルンドルフ=ヴァイブリンゲン (Schorndorf=Waiblingen) 地域が、それである。これらは、複数の管区 (Amt) から構成される場合が多いが、単独の管区のみで労働市場圏を構成することもある。

これらの労働市場圏のうち、他を圧する規模を示すシュトゥットガルト周辺地域については、後述の事例分析で詳述するが、それ以外の諸地域もそれぞれに独自の特徴を持つ。それらの内、行論に必要な限りで、若干の諸地域を挙げておこう。

まず、ウルム管区は、それ自身のみで労働市場を形成する。国境地帯に位置するために、ウルムへと向かうバイエルン居住ペンドラー労働者は、ヴュルテンベルク居住のそれ以上の数を記録している。バイエルン側の諸国境ゲマインデからウルム管区へは、2,697人もの人々がペンデルヴァンデルングを行っているのである。ゲマインデ単位の「労働場所と居住場所との分離」²⁴を前

表5 ヴュルテンベルク労働市場別規模 (1925、人)

	ペンドラー数		ペンドラー数
シュトゥットガルト周辺	49,916	オーベルンドルフ周辺	11,548
バイエルン居住	34	バーデン居住	593
ベジツヒハイム周辺	2,593	グミュンド周辺	8,333
ハイルブロン周辺	12,793	バイエルン居住	138
バイエルン居住	174	ウルム周辺	2,713
バーデン居住	335	バイエルン居住	2,697
ゲッピンゲン周辺	12,182	ラーフェンスブルク周辺	2,569
キルヒハイム周辺	17,020	ショルンドルフ周辺	3,751
		合計	95,047

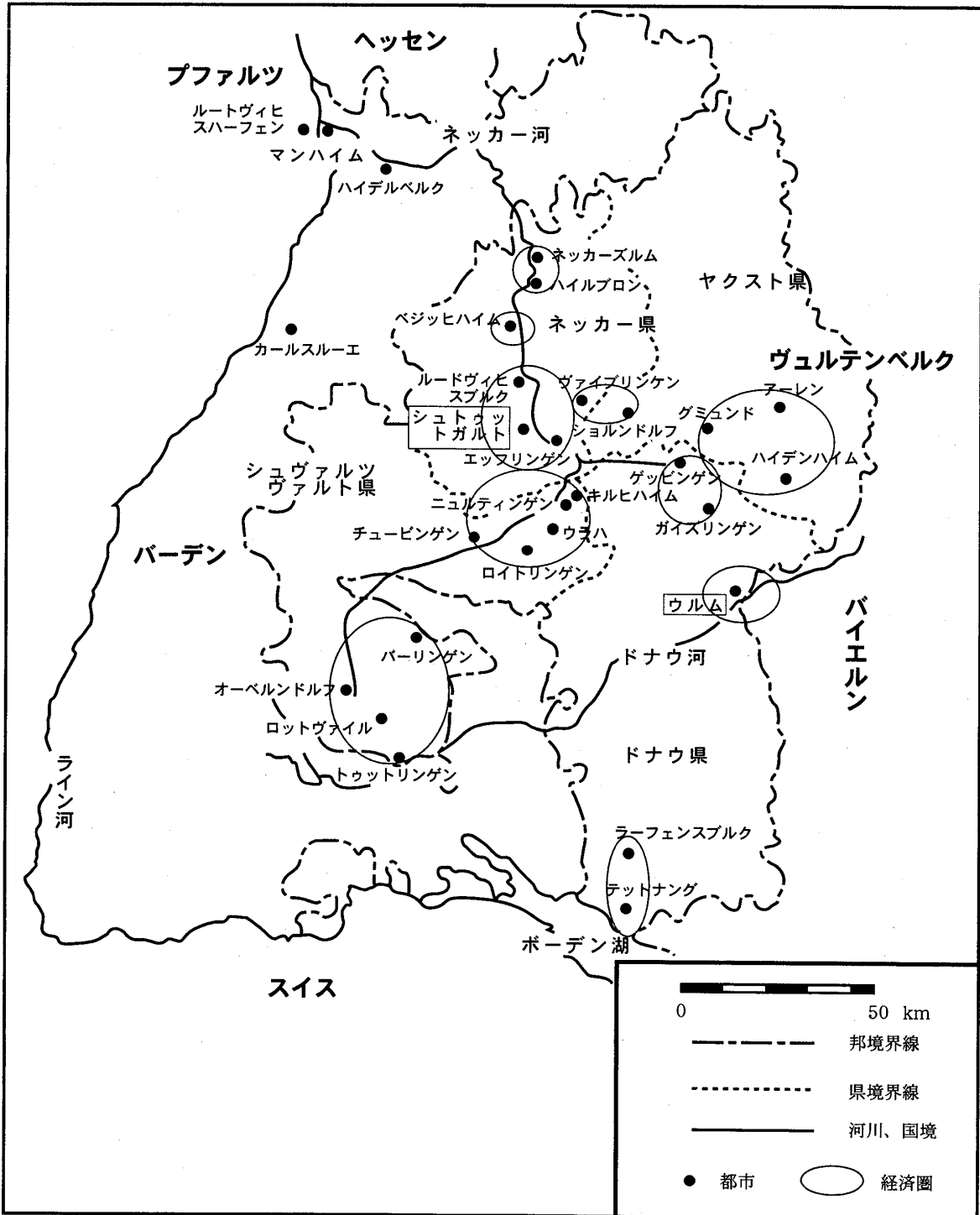
注：各労働市場の呼称は、それぞれ最大のペンドラー労働者数を示す都市に代表させて表記している。

出典：J. Griesmeier, a.a.O. の巻末の付表より作成。

²³ 一方で、農村に居住し男性労働者がペンドラー労働者として都市に赴く場合には、その妻たちが、「本来男性が行うべき農作業に従事せねばならず、同時に家事を行わなければならない」と、グラーベは述べる。ペンデルヴァンデルングに関わる女性の役割もまた、注目されてしかるべきである。Vgl. C. Grabe, a.a.O., S. 17.

²⁴ J. Griesmeier, a.a.O., S. 63.

図1 ヴュルテンベルク域内における労働市場



注1：経済圏を表す楕円はそれぞれの規模を示すものではなく、各類型を地図上に単純化して示したものである。

注2：ライン河は、一部を除き、バーデンとプファルツ並びにフランスとの境界線を兼ねている。

出典：J. Griesmeier, a. a. O., S. 70-81. の記述と表より作成。

提とするペンドラー労働者であるが、ここに見られるように、邦という政治的枠組みをも超えて労働市場が形成されることが、しばしば見出せるのである。そうした経済圏には、ハイルブロン＝ネッカーズルム地域も含まれよう。当該地域では、6,692人の人口を記録した1925年に、3,065人のヴェルテンベルク居住者、さらに、ヘッセンの都市であるヴィンプフェン (Wimpfen)、あるいは、バーデンのエンクラーフエ峡谷 (Enklave) 等に居住する235人がネッカーズルムへ通勤したことが、グリースマイアーによって報告されている。

また、一つの労働市場圏として見出されつつも、シュトゥットガルト地域の後背地としての役割を担う経済圏が存在した。ショルンドルフ＝ヴァイブリンゲン地域が、それである。ヴァイブリンゲン管区においては、1,918人の流入ペンドラーが記録されているが、同管区を居住場所とする流出ペンドラーは、5,887人もその人数に及んでいた。同様に、ショルンドルフ管区においては、その数は、1,883人ならびに2,873人と記録されている。こうした性格は、10を数える各労働市場の中でも、ショルンドルフ＝ヴァイブリンゲン地域のみが示しているのである。

以上、本節では、主として、グリースマイアーの所論を辿ることで、西南ドイツ・ペンドラー労働者の一般的状況を見てきた。無論、これだけでは、「都市農村連続体の『落とし子』」としてのペンドラー労働者の具体像は、まだ、明らかではない。次節では、ペンドラー労働者そのものの動向に即して検討を進めよう。

3. 個別事例分析：ペンドラー労働者の具体像

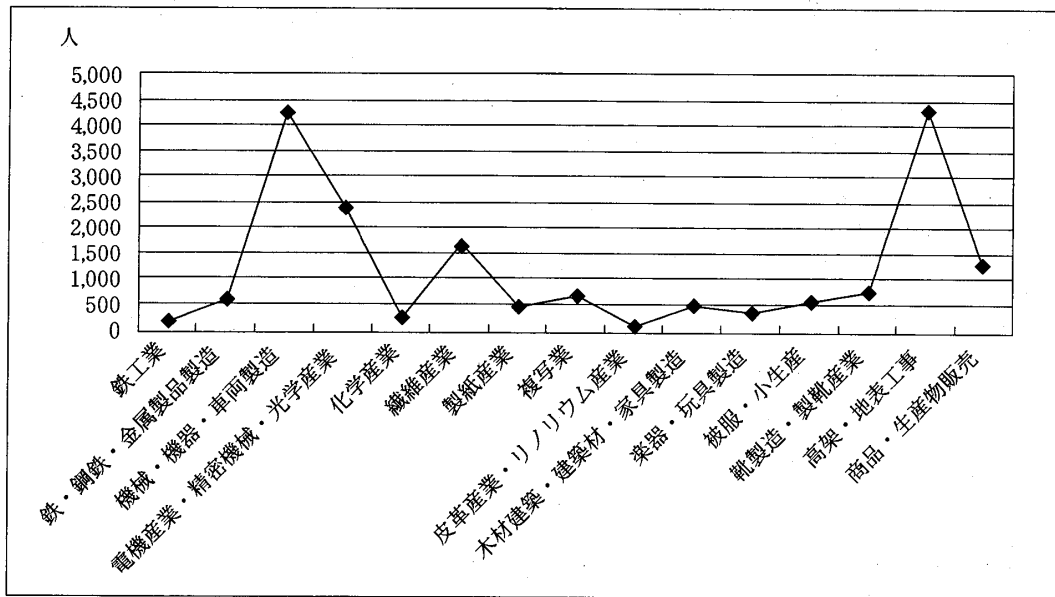
本節は、前節で明らかとなった一般的趨勢を前提とし、西南ドイツ・ペンドラー労働者の具体像をより鮮明に浮かび上がらせ、同時に、そこに見られる都市と農村の関係の一端を明らかにすることを課題とする。分析の素材は、西南ドイツ・ペンドラー労働者に関してなされた3つの事例研究である。すなわち、ヴェルテンベルク邦の首都であり、人口・労働者数・ペンドラー労働者数の全てにおいて卓越した数字を示すシュトゥットガルトの状況を分析したシュトロースハインの研究、グラubeによって分析された、バーデン邦に位置するハイデルベルク近郊の町キルヒハイムにおける一工場の労働者に関する研究、そして、プファルツの村落マウダッハ村の変容を示したカット (Cathleen S. Catt) の研究、以上の3つである。3氏の研究は、それぞれに独自の視点からの分析であるが、ペンドラー労働者の動向分析を通じて都市－農村関係のありようを探ろうとする本稿の課題にとっても、示唆に満ちたものである。

3. 1 シュトゥットガルト

本稿の本来的な対象時期は19・20世紀世紀転換期であるが、ここでは、やや時代は下って、両大戦間期である1933年の時点における状況を取り上げたい。

同年において、ヴェルテンベルク邦の首都シュトゥットガルトへやってくるペンドラー労働者は、合計で23,490人を数えた。それらのペンドラー労働者のうち、シュトゥットガルトから10km以内のゲマインデに居住するものが、全体の47.2% (11,091人) と、約半数を占める。10km以上となると、その割合は徐々に落ち込み (10-15km : 26.1%、15-20km : 14.3%、20-30km : 6.4%)、30km以上を越えるともはや少数しか存在しない (6.0%) という状況になっている。ペンドラーの大多数が、30km圏内からやってきていることが確認されよう。しかし、その一方で、シュ

表6 シュトゥットガルトにおけるペンドラー労働者の就業産業 (1925年)



出典：J. Griesmeier, a.a.O. の巻末の付表より作成。

トゥットガルトから50kmを越えた地点からも、ペンドラー労働者は訪れていることが、看過されてはならない。²⁵10km以内にペンドラー労働者の約半数が居住していることも事実であるが、彼らの居住ゲマインデは、驚くほど広範囲に渡っていると言えるのであり、換言するならば、都市における労働力需要がその周辺に及ぼす影響は、実は、相当な遠距離にまで達しているということなのである。

さらに、表6では、シュトゥットガルトのペンドラー労働者がどのような産業に従事しているのかを示している。この表に示された構図は、当該地域でどの産業がもっとも繁栄しているか、あるいは、どの産業が最も高い労働力需要を示しているかを同時に示している、と言える。シュトゥットガルトでは、鉄産業などの原料産業への就業が少なく、機械・車両製造業や高架・地表工事が突出し、次いで、電機産業が比較的多くのペンドラー労働者を雇用していることが見て取れる。そして、この電機産業の中には、ボッシュ社 (Robert Bosch A. G.)²⁶がシュトゥットガルトの西北に位置するフォイアーバッハ (Feuerbach) に位置し、大きな比重を占めていたのである。

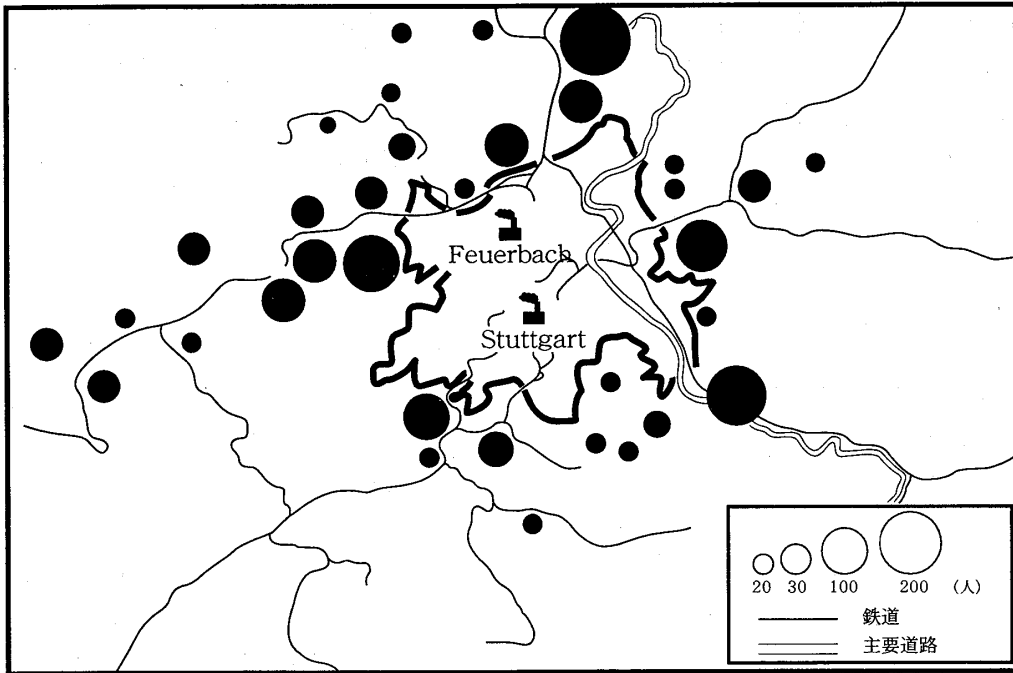
図2は、シュトロースハイน์が整理した電機産業に従事するペンドラー労働者の居住分布を示したものであるが、その多くは、フォイアーバッハに近いシュトゥットガルト西北からやってきていることが明らかである。いかにこのボッシュ社が近隣の農村からその労働力を引き出しているかが伺える。また、この図から、ペンドラー労働者の居住範囲が、鉄道路線沿いに広がっていることも見て取れよう。

さて、電機産業のみのペンドラー労働者の出身地域を概観したが、これら全ての産業を合計し

²⁵ 「同工場へ通う従業員の居住場所は、ネッカー県・ヤクスト県・シュヴァルツヴァルト県の大部分を含んでおり、西部・北部・東部においては、邦の境界の近辺まで達し、部分的にはそれを越えているだろう」。これは、シュトゥットガルト内の一市区、1929年フォイアーバッハに工場を持つボッシュ社の調査書において述べられたとされる一文であるが、こうした事態は当時から認知されていたのである。Vgl. K. Strohschein, a.a.O., S. 29.

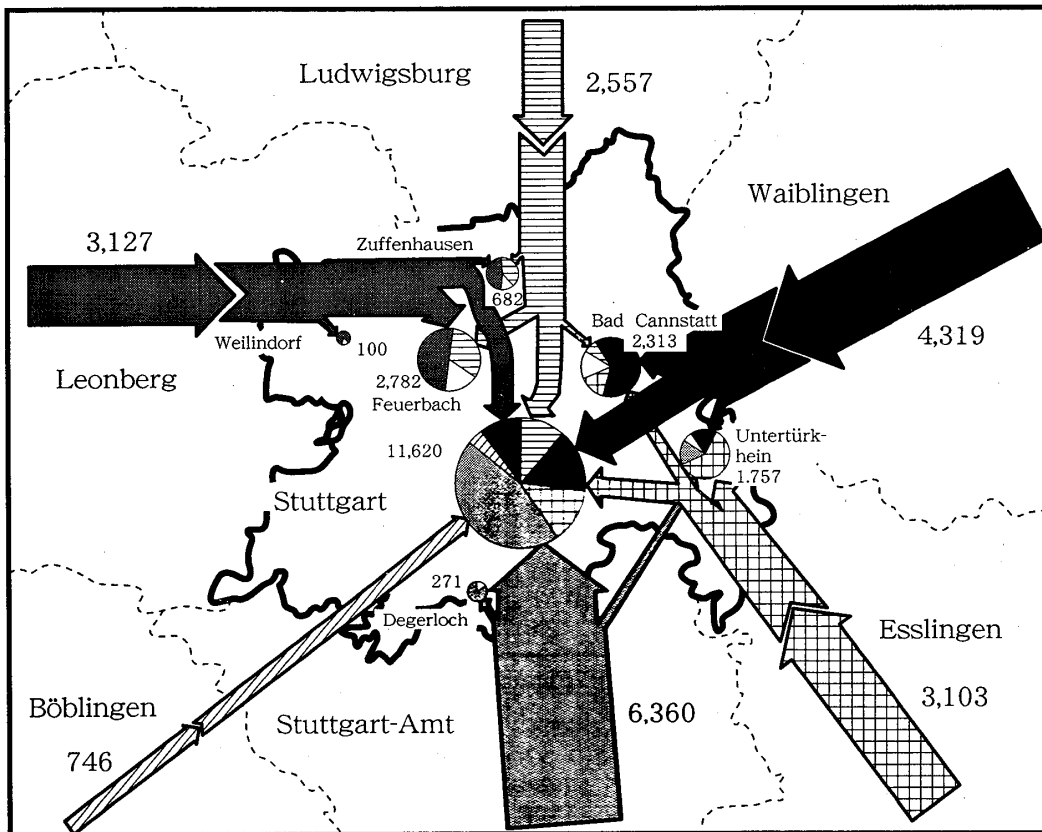
²⁶ グリースマイヤーによれば、ボッシュ社は、シュトゥットガルト地域におけるペンドラー労働者にとって、最も重要な経営であった。Vgl. J. Griesmeier, a.a.O., S. 98.

図2 シュトゥットガルトの電機産業へ就業するペンドラー労働者の居住分布 (1933年)



出典：Kurt Strohshein, Die Pendelwanderung Stuttgarts, Dissertation, Tübingen, 1937. の巻末の付表より作成。

図3 シュトゥットガルトへの周辺郡 (Oberamt) からのペンドラー流入 (1933年、人)



出典：K. Strohshein, a. a. O. の巻末の付表より作成。

た場合、どの方角からペンドラー労働者はシュトゥットガルトへやってくるのか。図3は、シュトゥットガルト周辺の郡からどれほどのペンドラー労働者が流入してくるのかを示したものである。シュトゥットガルトそれ自体が、一つの広い都市ゲマインデであるので、市内には複数の労働場所が存在する。各郡からのペンドラー労働者は、それぞれにより近い労働場所を選択して、集まってきている。例えば、南方に位置するシュトゥットガルト・アムト (Stuttgart Amt) からのペンドラー労働者は、比較的に近いシュトゥットガルトの旧市街において就業しているが、北方のツッフェンハウゼン (Zuffenhausen) や西北のフォイアーバッハへは、ほとんど赴いていない。また、各郡からやってくる、ペンドラー労働者の数にもばらつきがあることが見てとれよう。比較的遠距離に位置するベープリンゲン (Böblingen) を除いても、南方のシュトゥットガルト・アムトからは6,360人が流入しているのに対し、北方のルートヴィヒスブルク (Ludwigsburg) からは2,557人しか流入していない。このような現象は、各郡の人口の多寡に規定されるのではなく、各労働者が通勤の都合のより良い労働場所を選択した結果である。つまり、ルートヴィヒスブルクに住むペンドラー労働者が、他に比して少ないのは、同郡に居住するペンドラー労働者達が、シュトゥットガルトにおいて就業するか、あるいは、同郡在の都市ルートヴィヒスブルクにおいて就業するかを選択した結果である。一方で、南方のシュトゥットガルト・アムトには、比較的近郊に大きな労働需要を持つ都市が存在しないので、最も近い都市シュトゥットガルトへ多くの労働者が流入してくるのである。このように、ペンドラー労働者の居住場所の分布は、その労働場所を中心とした同心円を描くことは、むしろ稀であり、他の労働場所の配置や、鉄道路線により、放射状の形状で広がっている。

また、これまでシュトゥットガルトへ流入してくるペンドラーのみについて言及してきたが、実際には、シュトゥットガルトから外部のゲマインデへ、言わば都市から衛星都市へ、あるいは農村へという逆方向の流れを形成するペンドラー労働者も存在している点、注意を要する。シュトゥットガルトの事例で言えば、1933年において、3,193人も労働者がシュトゥットガルトにおいて居住しつつ、その外部のゲマインデにおいて労働していた。こうしたシュトゥットガルトの流出ペンドラー労働者は、全人口の0.8%を占め、それは就業者人口の1.7%に当たる。²⁷こうした逆方向の流れは、ペンドラー労働者の実態を追っている本稿においては、「都市農村連続体」のすぐれてダイナミックな個性を物語る1証左として、強調されてよい。

以上、シュトゥットガルトを例に挙げながら、ペンドラー労働者が形成する流れを観察した。次に、ペンドラー労働者自体の通勤状況を把握することで、居住ゲマインデの都市化への参加を詳細に見ていく。

3. 2 ペンドラー労働者の負担

都市全体におけるペンドラー労働者ではなく、一工場におけるペンドラー労働者を詳細に観察した研究者の一人が、グラーベである。グラーベの所論は、ペンドラー労働者の多大な経済的・

²⁷ 加藤房雄氏は、ランゲヴィーシェ (D. Langewiesche) の研究を引き合いに出しつつ、プロイセンにおけるこの都市から農村へのペンデルヴァンデルングの流れを数量的に示している。それによれば、プロイセンでは1907年時点で、279,014人のペンドラー労働者のうち、72,429人 (25.98%) が、この流れを形成している。加藤房雄「プロイセン都市近郊農村史とベルリン」、8頁。

²⁸ 例えば、20kmの道のりを鉄道を利用して通勤するペンドラー労働者は、週2.7マルクの週定期券 (Arbeitermonatekarten) を購入せねばならず、その金額は、一年間で135マルクに達する。こうした出費は、農村地区の廉価な家賃という長所をも解消してしまう、とグラーベはしている。Vgl. C. Grabe, a. a. O., S. 10-13.

時間的負担を憂慮したものであり、彼らの生活上における費用に関し具体的数値を挙げ²⁸、さらに、バーデン邦、ハイデルベルク近郊のキルヒハイムに位置するフックス車両工場における労働者状況を分析している。

同工場における労働者の数は、最大時で約2千人を雇用しており、他方で、労働者を送るゲマインデは、1922年の時点で92であり、図4はそのうちの主なものを示している。これらのゲマインデは、大小さまざまな規模であるが、ほとんどのゲマインデが多分に農村的色彩を持っており、唯一ハイデルベルクだけが、都市と言えるものであった。

さて、グラーベにおいては、キルヒハイムからの直線距離ではなく、そこへの到達過程を指標に、労働者の居住ゲマインデを5つに分類をしていることが注目される(表7参照)。すなわち、キルヒハイムそれ自身とその隣接ゲマインデのロールバッハ(Rohrbach)をグループIとし、次にキルヒハイムから4kmから12kmまでの場所に位置し、都市的要素の強いハイデルベルクとノイエンハイム(Neuenheim)をグループII、またそれとほぼ同距離に位置する、両者以外の農村ゲマインデをグループIII、そして、キルヒハイムから12km以上は離れているが、鉄道駅があるゲマインデはグループIVとし、キルヒハイムまでの距離にかかわらず、到達までに40分以上の徒歩を必要とするゲマインデをグループVとしている。各グループは、通勤によるペンドラー労働者への肉体的・時間的負担の如何によって分類されているのであり、その負担は、グループIからVへとなるに従い、増加している。

さて、これらのグループに属する労働者数は、グループIからVへと進むに従い、明らかに減少している。前節のシュトゥットガルトの事例では、ペンドラー労働者の居住場所は、鉄道路線沿いに広がっていることが示された。ここでも、鉄道路線の敷設状況により、比較的遠距離でも容易に到達できるところからは、多くの労働者がペンドラー労働者として通勤していることが見てとれるが、他方で、ガイベルク(Gaiberg)のような、直線距離にして10kmほどの距離に位置するゲマインデでも、その交通手段が徒歩、あるいは自転車しかないために、最も負担の大きいグループVに分類され、同村落からのペンドラー労働者は少人数に限られていることが注目され

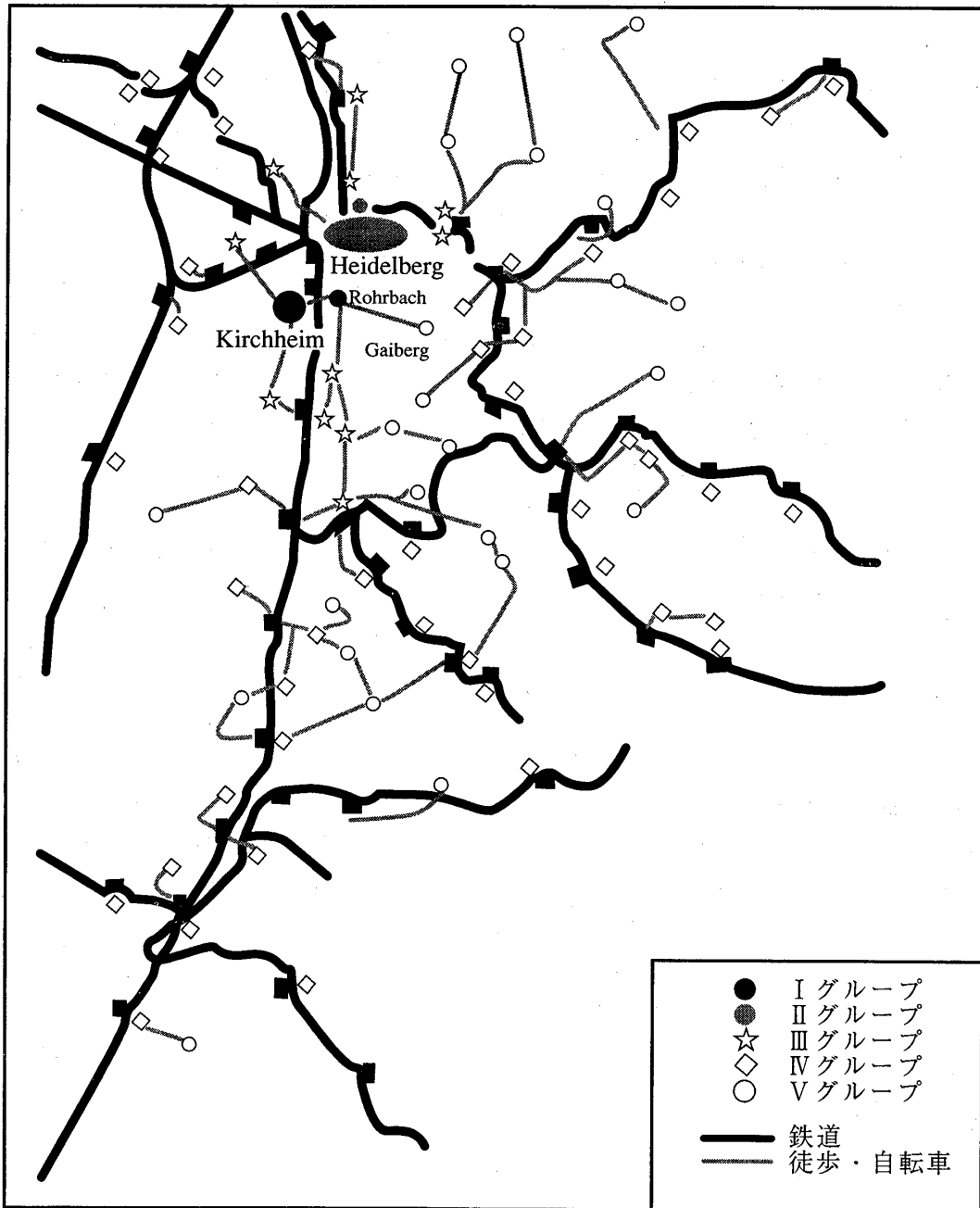
表7 フックス車両工場に従事する労働者達の居住場所(1922年-1924年)

グループ	人数(人)	割合(%)
グループI (キルヒハイム・ロールバッハ)	1,090	37.5
グループII (ハイデルベルク・ノイエンハイム)	638	22.0
グループIII (4から12kmまでの鉄道駅を持つゲマインデ)	806	27.7
グループIV (12km以上はなれた鉄道駅を持つゲマインデ)	263	9.1
グループV (鉄道駅から40分以上離れたゲマインデ)	109	3.8

出典：Charlotte Grabe, Der Einfluss der Pendelwanderung auf die Arbeitnehmer, in: *Wirtschaftsstudien*, Jg. 1926, S. 26の記述と表より作成。

²⁹ この状況は、ヴェルテンベルクのヤクスト県在の村落エルンスバッハ(Ernstbach)にも当てはまる。1895年においては、50%以上もの人々が農業・林業に従事した一方で、工業・手工業に従事する人々は、およそ25%であった。当時のエルンスバッハが、このような比較的農村的な就業構造を持たざるをえなかったことの原因は、同村落が、ホーエンローエ地域の中でも比較的工業優位の状況にあったにも拘らず、1870年代にハイルブロンからシュヴェービッシュ・ハル(Schwäbisch Hall)へと伸びる鉄道が、この地域を避けて建設されたことが、主要な要因であった。20世紀に入り、コッヘル谷道路(Kochertalstrasse)が建設され、連邦道路B14やA16に接続されたことによって、ようやく交通問題の一応の解決を見るに至ると、同村落の就業構造は一変した。工業・手工業に従事する人々の割合は、1933年には約49%に上昇し、その後も、1950年には約62%、1970年には約80%にも達した。同村は、まさに、「農民村落から工業村落」への転身を果たしたのである。Vgl. Eberhard Kugler, *Von Bauern- Zum Industriedorf Dargestellt an der Entwicklung Ernstbach am Koche*, 1998.

図4 キルヒハイム近郊地図

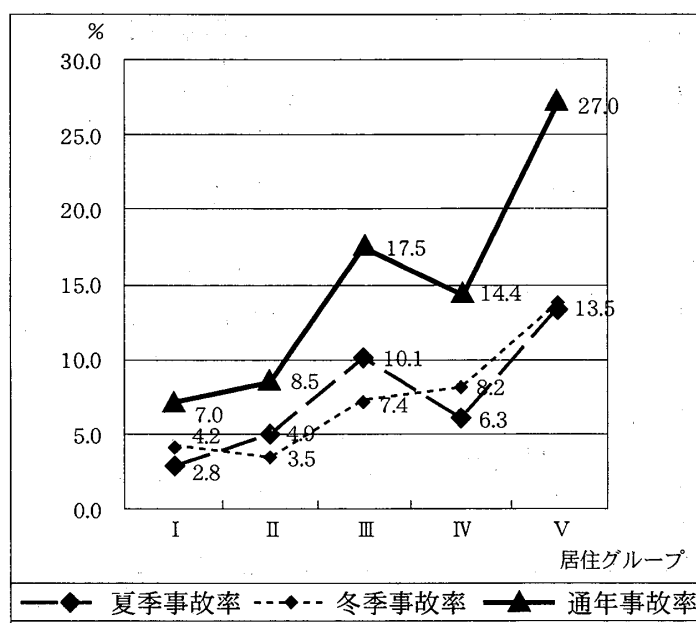


出典：C. Grabe, a. a. O. の巻末の付表より作成。

る。こうしたことは、当該時期の著しい工業発展の陰に、それから取り残されざるをえなかった一農村も存在したことを示す好例であろう。²⁹

表8は、各グループからの労働者が労働中に引き起こした事故率を示したものである。労働中の事故は、偶発的な要因のほかにも、その労働者の肉体的、あるいは精神的疲労から引き起こされてしまうとの考えから、先の居住グループ別の負担を裏付けるのに有効であると考えられる。尚、この統計では、若年層はその未熟さから、老年層は肉体的衰えのために、居住グループ別の事故率を歪めて表してしまう可能性があるため、除外されている。同表では、通年と夏季における事故率が、通勤による負担に相応していないことが、注目される。これは、グループⅢの異常

表8 フックス車両工場における事故率の変化



出典：C. Grabe, a.a.O. の巻末の付表より作成。

な事故率の高さによるものと考えられ、つまり、グループⅢの労働者たちには、通勤による負担の他に、別の負担が課せられていたと推察されるのである。では、グループⅢの労働者に課せられた負担とは、何か。グラubeによれば、それは、夏季に行う農作業による負担であった。グループⅢの労働者たちは、同程度の距離にあるハイデルベルクといった都市ゲマインデとは違い、農村ゲマインデに居住していた。そこに住む労働者の多くは、本稿でも注目している労働者農夫たちであったと思われ、彼らは工場労働に従事する前、つまり、早朝に2、3時間農作業を行った後に、工場労働へ向かっていたのである。この状況は、グループⅣやⅤの比較的遠方にある労働者には、時間的理由から当てはまらず、それゆえ、グループⅢの事故率は、グループⅣの事故率を上回ることとなったのである。³⁰

以上のことから、さしあつて以下の2点を指摘しておきたい。本事例では、主に、キルヒハイムへ通勤する労働者達の負担を基準として分類した統計を用いた。既に明らかなように、各居住ゲマインデ側からすると、労働者たちの種類の負担の大きさが、その農村における、都市の拡大あるいは工業化への関わりや状況を決定する一要因であったこと。そして、労働者農夫の近代的形態としての性格を併せ持つとされた、西南ドイツのペンドラー労働者たちとは、本事例では4から12kmの比較的近距离に位置する、通勤環境が良好な農村に居住する労働者たちと目されること。この2点である。

3.3 マウダッハ村の変容

これまで、ペンドラー労働者の動向に即して検討してきたが、では、そうしたペンドラー労働者の発生に伴い、都市近郊農村はいかなる変容を経験したのか。本節では、この1点に的を絞り、

³⁰ 冬季の事故率も、通勤による負担に相応した形になっていない。これは、グループⅡの事故率の低さに起因していると思われるが、これについてグラubeは「偶然であるかどうか、判断できない」としている。C. Grabe, a.a.O., S. 30.

図5 マウダッハ村周辺地図



出典：C. Catt, *The rural proletariat. The everyday life of rural labourers in the Magdeburg region*, in: *The german peasantry*, p. 137. の図より作成。

その目的に即し好個の1事例を提示したカットの研究を辿る。³¹彼女の研究は、19世紀後半におけるバイエルン・プファルツに位置するマウダッハ村 (Maudach) を対象としており、本稿の止目する西南ドイツの特徴を十分に体現していると見てよい。また、ここで述べられる時期は、これまでの事例よりも早く、19世紀後半であるが、ペンドラー労働者の黎明期とも言える時期の都市近郊農村の状況が観察されるであろう。

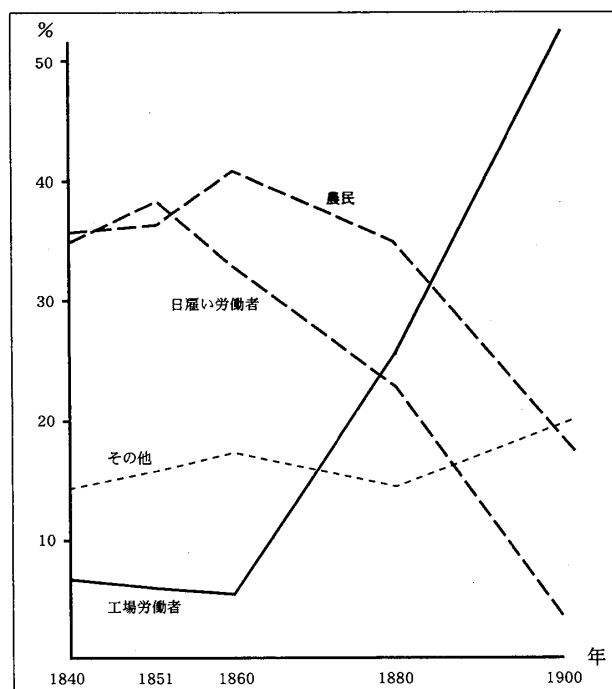
さて、図5はマウダッハ村周辺の位置関係を示しているが、同村落は、マンハイムとともに工業地帯を形成したルートヴィヒスハーフェンから約4 kmの場所に位置しており、19世紀におけるマウダッハの著しい変容を考察するには、隣町であるルートヴィヒスハーフェンの成長をあわせて考察せねばならない。ルートヴィヒスハーフェンは、1840年の時点で、たったの90人しか住んでいない小さな港町であった。この地域で化学産業と軽機械製造業とが根付いたことに伴い、この町の農村的性格は薄れ、1905年になると72,286人の住人を抱える一都市へと変容した。65年の間に、803倍もの増加率を示したのである。とりわけ、バーデン・アニリン・ソーダ工場 (Badische Anilin-Sodafabrik, BASF) の建設が、その成長に与って力があつた。³²マウダッハ村は、約4 kmしか離れていないルートヴィヒスハーフェンのこの著しい成長と、決して無関係ではありえなかったが、しかし、人口規模の点で言えば、その増加率は約2倍にとどまる。すなわち、1835年の828人から、1895年の1,521人への増加しか示さなかつたのである。とは言え、その社会構造に目を向けるならば、マウダッハ村が受けた影響は甚大なものだったのである。

表9は、1840年から1900年までの同村落における職業比率を示したものである。「その他」と表記されているものは、大工や鍛冶屋、あるいは旅館経営者といった独立自営業者がほとんどを占めている。一見して、同村落の被った変化が、いかに甚大なものであつたかが看取できよう。同

³¹ C. Catt, *The rural proletariat. The everyday life of rural labourers in the Magdeburg region*, in: Richard J. Evans and Robert Lee (eds.), *The german peasantry*, London/Sydney, 1986, p. 129-154. 本節における事実関係は、全て、ここにおいている。

³² *ibid.*, p. 131-132.

表9 マウダッハ村の職業構成の変化



出典：C. Catt, *op. cit.*, p. 135. の表と記述より作成。

表によれば、1840年の段階では、農民と日雇い労働者との割合は大差がなく、共に、就業者人口の約3分の1を占めている。残りの3分の1は、その他のグループと工場労働者で占められているが、なかでも工場労働者の割合は最も少なく、村落の中で少数派の地位にあった。1860年までの20年間で、若干の変動が認められるが、それ以降の変化は、さらに激しい。1900年に至る40年間で、「その他」の割合は、やや増加している程度に過ぎないものの、工場労働者の割合が、急激に上昇し、村落内の半数以上を占めるグループにまで成長している。他方、農民の割合は著しく落ち込み³³、日雇い労働者は、もはや、重要な位置を占めていない。こうした状況から、マウダッハは、この期間の間に、「(1840年において、人口の約70%が農業従事からその生計を得ていた)農村共同体から、農業によってその生計をいまだ得ている人々と、工業における雇用で生活している人々とに分けられる共同体へと変化した」³⁴と、カッツは位置づけている。こうした変容は1860年からの工場労働者の増加によって引き起こされ、とりわけ、1864年に、ルードヴィッヒスハーフェンの北部でBASFが設立されて以来、加速されてきたのである。すなわち、4 km先にあるルードヴィッヒスハーフェンのBASFをはじめとする諸工場が、マウダッハに居住する労働力をペンドラー労働者としてよび寄せた結果、近郊農村であるマウダッハ村は、就業構造において、甚大な変化を経験することとなった。

では、マウダッハ村のペンドラー労働者は、一体どこから現れたのであろうか。先の分析では、一見すると、日雇い労働者であった者達が、ペンドラー労働者へ転身したように思われる。しかし、事態はそれほど単純ではない。確かに、多くの日雇い労働者がペンドラー労働者になることを選んだのだが、その転身は、再び日雇い労働者に戻ることになる不安定さを含んだものであ

³³ ただし、農民の絶対数は、割合が著しく低下した1900年においても、1840年当時と比べ、なお若干の増加を示したことが、カッツにより記載されている。*ibid.*, p.136.

³⁴ *ibid.*, p. 132.

た。また、マウダッハにおける農民のほとんどの者、すなわち80%から90%の農民が、一生涯を通じて農民のままであったが、1870年代と80年代との農業不況によって、幾人かの農民たちもまた、工場労働者へと転身せざるをえなかった。多くの農民の息子達も、均分相続による農地を受け継ぐ前か、あるいは、単独相続の場合には、農地が一人の息子だけに相続されたために、工場へ就業する道を選んだ。さらに、従来のマウダッハの住民以外にも、この地域における就業の可能性を求めて、移住してくる者達が、ルードヴィッヒスハーフェンへ通勤することを選んだ。彼らは、居住条件の有利さにひかれて、マウダッハに移り住み、通勤の道のりの苦勞を選んだ者たちであった。

カットは、「マウダッハからの工場労働者達は、地代が都市におけるよりもマウダッハにおけるほうがはるかに低かったので、断然良い状況にあったし、そして、もし彼らが小地片を所有したならば、その土地で栽培された生産物が家族の食事を補助できたであろう³⁵と述べている。このような、小さいながらも土地を所有するペンドラー労働者の割合は、1880年の時点で、全体の約5分の1を占めていた。その数字は1900年になると約3分の1に上昇した。カットの以下の指摘は、都市近郊農村に居住するペンドラー労働者の実態を示すものとして重要と思われる。

「均分相続と工場において上昇する雇用機会とを仮定すれば、日雇い労働者達は、工業の雇用にますます魅惑された。…しかしながら、村落において土地を所有する工場労働者達の多くは、実際には、村落への移民たちであった。おそらく、村落へ移動してきたこのグループは、何よりも、その地域における雇用機会に惹かれ、次いで、自身の工業賃金を、土地を購入することに使用し、後にマウダッハで結婚して、安定した家族生活を営むために使用した。次に、選択的な移住は、土地を所有する工場労働者の割合における上昇の原因であろう。なぜならば、農村において何ら利害関係を持たない人々は、出て行く傾向にあるだろうし、とりわけ、この地域の諸企業が、自身の宿泊施設をその労働者達に提供したからである。」³⁶

ペンドラー労働者は、以上のように様々な事情を抱える人々によって構成されているが、ともかくも、世紀転換期には、村落内での就業者人口の50%を占め、村落内で最大の多数派となった。このことは、当時の社会的状況にいかなる影響を与えたのであろうか。とりわけ、19世紀半ばまで、日雇い労働者に対する経済的支配力を通じて、村落の支配的地位を保持した農民達の権力構造に変化が見られたのか否か、次の課題は、これである。

カットによれば、同村落のゲマインデ議会 (Council, Gemeinderat) の議席数は14であったが、例外的に、2、3人の自営業者の名前が見られるだけで、残りの議席はほぼ農民が占めていた。議長にいたっては、表10に示すように、10haを越す農地を持つグルーネル家 (Gruner) と、クンメルメール家 (Kummermehr) がほぼ独占しており、ゲマインデ議会の構成に見られる村落の権力構造には、19世紀を通じて、大きな変化はなかったとされる。日雇い労働者に対する経済的支配力を失った農民層が、このように政治的権力を保持しえた理由は、市民権を持つものが誰であるの

表10 ゲマインデ議会歴代議長

就任期間	議長名
1818-33	Peter Gruner
1833-48	Johann Gruner
1848・49	Michael Amberger
1849-59	Anton Gruner
1859-72	Johann A. Anton Ginkel
1872-85	George Kummermehr
1885-99	Johann Kummermehr

出典：C. Catt, *op. cit.*, p. 147. の記述より作成。

³⁵ *ibid.*, p. 134.

³⁶ *ibid.*, p. 144.

か、ということにあった。投票権を持つ市民になるためには、多額の費用が必要であり、工場労働者たちはもとより、マウダッハへ移住してきた者たちにとっても、それは彼らの資力を超えるものであり、ゲマインデ議会の議席構造を変化させるものではなかったのである。

では、農民の権力に全く変化は見られなかったのか。いや、決して、そうではなかった。その変化は、より上位の政治体、すなわち、地方政府との関係に現れていたのである。19世紀の中葉においては、ゲマインデ議会は、村落内の多くことに決定権を持っていた。例えば、夜間監視者と警察官、さらに、学校の教師も任命し、さらに、議会は、救貧委員会の予算を決定することもできた。しかも、1860年までは、地方政府において決定されたことを、ゲマインデ議会が拒否することもしばしばあったのである。しかし、その1860年の道路建設の維持・建築コストに関する論争で、地方政府に負けてからは、ゲマインデ議会の権限は縮小されていった。膨大な資料の整理・提出を行うゲマインデ議会の官僚政治化は、やがて、管轄区域の縮小に進展していったのである。それまでゲマインデ議会の権限であった教師の任命や、他の立法権も、徐々に、地方政府の物となっていった。その結果、彼らは、村落の支配者の様相よりもむしろ、「公僕階層 (Band of civil servant)」³⁷の様相を強めていったとされる。

このことは、上位政府への権力集中の一事例とも捉えられるのであるが、村落内における農民達の経済的地位の低下に相応する現象であると、カットは結論づけている。それは、当然に、近郊都市ルードヴィヒスハーフェンの工業化と、これに伴う村落内におけるペンドラー労働者の著しい増加によるものであり、こうした事態は、19世紀後半において、村落内の政治的構造を著しく変化させたのではたどえなかつたにしても、支配階級であった農民の経済的基盤を、掘り崩しつつあった、と言えよう。

4. むすび

本稿は、西南ドイツにおける都市近郊農村の変容に迫ることを課題として、その具体的一現象たるペンドラー労働者の動向分析に焦点を当ててきた。分析の前半、すなわち第2節では、主としてグリースマイアーの所論を辿ることで、ペンドラーの一般的趨勢を、そして、後半の第3節では、各事例研究に示されたペンドラー労働者に固有の諸特徴をそれぞれ提示することが試みられた。最後に、本稿における実証成果をさしあたり以下の三点に整理することにより、むすびに代えたい。

第1に、広く知られているとおり、とりわけネッカー県やシュヴァルツヴァルト県において行われてきた均分相続制度は、古来、土地の零細化を生み、多くの農民は、その経営だけでは家計を維持できない状況にあった。この状況は、19世紀後半における人口増加に起因する土地価格の高騰に伴い、より一層悪化した。これまでは、彼らは労働者農夫として、手工業等に就いていたが、折からの経済発展に伴いその状況は変化した。主として、都市やその近郊において、諸工場が建設され、そこに多大な雇用機会が創出されたことと同時に、都市への交通機関が整備され、一日で、それら諸工場までの往復が可能になったことが、ペンデルヴァンデルングを生み出したのである。労働機会について補足するならば、当時、ペンドラー労働者を雇用した諸経営は、大

³⁷ *ibid.*, p. 149.

企業がその大半を占めていた。折から進む「高度産業化」によって、生産の主流となった高価な機械の購入のために、諸経営は経営の拡大を実行しなければならなかった。それゆえ、経営側からの労働需要も高まり、その結果、経営周辺からの労働力では不足し、遠方からの労働力も雇用するようになった。こうして、農村からと、都市あるいは工業所在地とからの二側面において、同時に、ペンドラー労働者が発生する背景が生まれてきたのである。

第2に、事例分析では、それまでの検討を踏まえたうえで、西南ドイツ・ペンドラー労働者の具体像を模索した。まず、シュトゥットガルトの事例では、都市に集まるペンドラー労働者が居住する諸地域の広がり、フックス車両工場の事例では、より詳細に個々のゲマインデをそれぞれ紹介した。そこで示された状況とは、実は、都市から周辺村落へ押し寄せた都市化ないし工業化の波の実際の姿にはかならない。同じくキルヒハイムの事例では、本稿で一貫して止目された労働者農夫の、居住場所も確認された。農村に住むペンドラー労働者が、すべて労働者農夫としての性格を維持していたのではないのである。また、最後の事例分析では、農民村落であったバーデンのマウダッハが、ペンドラー居住村落へと姿を変えていく様を観察した。それは、マウダッハが、近隣工業地域であるルードヴィヒスハーフェンへの一近郊へと変容していく過程であったと同時に、ゲマインデ議会をほぼ独占してきた農民層の政治的基盤が揺らいでいく過程でもあった。この一事例は、19世紀後半において生じたことであったが、同様のことが、ペンドラー労働者がその規模を大きく拡大させた20世紀に、多くの都市近郊において生じたのではないだろうか。今後の検討課題としたい。

第3に、グリースマイアーの詳細な分析を基に示された図1の楕円とは、一体何であったのかを、問題としたい。単純化した姿に過ぎぬは言え、同図の楕円は、都市と周辺との地域的経済的繋がりを示したものであり、実は、これこそが都市を中心として、周辺農業地域を巻き込んだ経済圏の姿を映し出すものだったのではないだろうか。ペンドラー労働者の動向分析により得られた経済圏の析出は、このように、一種の地域構成論に繋がりうるものだったように思われる。グリースマイアーは、ヴェルテンベルクを対象としたため、西南ドイツにおいて邦の枠組みを超えて形成された「バーデン・ヴェルテンベルク工業地帯」の一重要地域たるマンハイム周辺を、考察の範囲に含めていない。西南ドイツにおける都市・近郊農村の全容を探るためには、同地域に関する検討が不可欠であろう。この点も、今後の一課題としたい。次稿で検討される予定である。